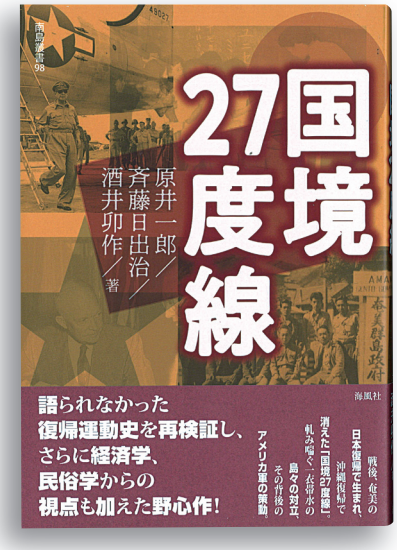
本の紹介

国境27度線

原井一郎／斉藤日出治／酒井卯作／著



海風社

定価:1,800円（税別）　TEL／06-6541-1807

著者略歴

原井 一郎（はらい いちろう）
1949年、徳島県生まれ。奄美の日本復帰後、奄美大島・名瀬へ。
地元日刊紙の南海日日、大島新聞記者・編集超。雑誌Lapizライター。
ジャーナリアスト。奄美市名瀬在住。
主な著書
『奄美の四季』（農文協1988年）、『苦い砂糖』（高城書房2005年）、
『欲望の砂糖史』（森話社2014年）他。

斉藤 日出治（さいとう ひでは る）
1945年生まれ。社会経済学・現代資本主義論専攻。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。元・大阪産業大学経済学部教授、大阪労働学校・アソシエ学長
主な著書。
『グローバル化を超える市民社会』（新泉社2010年）、『帝国を超えて---グローバル市民社会論序説』（大村書店2005年）、『空間批判と対抗社会』（現代企画室2003年）
『国家を超える市民社会』（現代企画室1998年）他。

酒井 卯作（さかい うさく）
1925年、長崎県西彼杵郡西海町（現・西海市）生まれ。民俗学者。1950年坪井洋文とともに民俗学研究所の研究員となり、柳田国男と出会う。南島研究会や稲作史研究会などの旅で、柳田のカバン持ちとして同行、薫陶を受ける。南島研究会主宰。
主な著書
『稲の祭』（岩崎書店1985年）、『琉球列島における死霊祭祀の構造』（第一書房1987年第28回柳田賞受賞）、『琉球列島民俗語彙』編著（第一書房2002年）、
『柳田国男と琉球「海南小記」をよむ』（森話社2010年）他。

転載
出版社・海風社の許可を頂き『国境27度線』の「あとがき」全文を転載いたします。
（●文字組は当誌に合わせました）

あとがき

原井一郎は、戦後奄美の復帰運動史を自分史と重ね合わせながらたどり、本書を著わした。奄美の復帰運動史は、米軍の軍政下という逆境に立ち向かう奄美民衆が民族運動を高揚させ「復帰をかちとった」運動として記憶され記録されている。だが、本書で原井が執拗にこだわるのは、奄美の「日本復帰」によって生まれた〈国境二七度線〉である。この国境線は、奄美の「日本復帰」によって誕生し、一九七二年の沖縄の「日本復帰」によってすでに消え去っている。その消え去った国境線に原井はなぜ執拗にこだわるのであろうか。この国境線は、奄美群島と沖縄の民衆が同じ琉球弧に暮らす同胞としてつながっていたその結びつきを断ち切り、両者のあいだに深い亀裂を入れ、激しい憎悪と敵対の感情を惹起したからである。琉球弧民衆を切り裂いた刃は、二七度線が消え去ったいまも、原井の心に深く突き刺さったとげのようにして居座り続けている。

原井の痛みと怒りは、奄美群島と沖縄諸島をふくむ南島地域を周辺化し、さらには南島の住民たちを引き裂いたまま置き去りにして戦後復興を遂げていった戦後日本の体制と日本国家へとむけられる。〈国境二七度線〉とは、戦後日本の国家が琉球弧を切り裂いた刃なのだ。

酒井卯作は、一七～一九世紀に薩摩藩の支配下で、年貢の厳しい取り立てや黒糖の収奪という圧政に苦しみ、災害による飢餓を経験した奄美諸島の民衆の過酷な生活を詳細に描き出し、権力者の支配に呻吟し、その圧政に抵抗した奄美の民衆の悲惨な歴史を語ると同時に、その圧政に抗する農民のしたたかな強訴の闘いを紹介することによって、大和国家による南島の収奪に無知な「大和人の不作法」を告発する。

斉藤日出治は、奄美群島、沖縄諸島を一つに結ぶ琉球弧民衆の暮らしが〈国境線の政治〉によって裁断され、この地域が近代国家の植民地として、帝国主義戦争の道具として利用され破壊された歴史をふりかえると同時に、その歴史に抗して自治と自律の暮らしをうちたてるために戦う琉球弧民衆の息吹を伝えることによって、原井の怒りに呼応する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

だが、原井は、〈国境二七度線〉という思考回路を通って、さらに深い地平へとその歩を進めているように思われる。

国境線が切り裂いたもの、それは南島の同胞のきずなであると同時に、南島の同胞が自然と不可分に築き上げてきた精神文化、生と死の融合した死生観である。日本の近代国家は、国家よりもはるかに広大で深遠なこの南島の精神文化をうち砕いた。近代国家による先近代的世界の精神文化の破壊を植民地主義と呼ぶならば、原井が〈国境二七度線〉に読み取ったものは、ほかならぬこの植民地主義である。

原井は、現在、京都大学による奄美人の人骨盗掘に抗議し、その遺骨の返還を求める運動に取り組んでいる。京都帝国大学医学部の清野謙次率いるグループは、戦前に奄美群島から二六〇体あまりの遺骨を盗掘し、日本人のルーツを解明するために頭蓋骨の分析を行った。この奄美の盗掘は、奄美住民のアイヌに対する差別意識を利用して、琉球人こそが日本人のルーツであることを立証するというかげ声のもとに行われた。人骨の学術研究は人種主義イデオロ

ギーを正当化し、人種差別を根拠づける知としてその役割を果たしたのである。

戦後、京都大学は、その盗掘した遺骨を資料室に収蔵したまま現在に至っている。現在、京都大学には、沖縄島七二体、奄美群島二六三体の遺骨が収蔵・保管されている。原井は「京都大収蔵の遺骨返還を求める奄美三島連絡協議会」を結成し、京都大学との交渉、遺骨が盗掘された現地での説明会、シンポジウムの開催などに奔走している。

この活動と合わせて、原井は、奄美の民衆に古くから根づいている死者を弔う固有の営みを探求し、その営みのなかに近代世界が喪失した独自の死生観を発見する。奄美には、岩穴や洞窟に遺体を安置して風にさらす風葬という葬法がある。この葬法は、遺骨を慈しみ、生者が死者を思い、死者と交流しつつ死者を懇ろに弔う南島に固有な伝統的精神文化を表わしている。そのような精神文化からすると、近代における火葬という葬法は、死者の肉体をさいなみ、生者との繋がりを断ち切る残酷な葬法として、奄美群島では近代になって火葬を導入するに際して、住民の強い抵抗に遭った。

原井は、喜界島の島民がムヤ（喪屋）という洞窟に遺体を安置する葬法を知って、そこに深い畏敬の念を抱く。生と死、人間界と異界、人と自然が不分明なままに交流しあうこの精神世界に対して、近代文明は、この両者に深い仕切りを入れ、死や異界や自然を排除し、それらを支配の対象に収めてしまった。奄美群島における死者と遺骨は、この地域に悠久の時間を通してはぐくまれてきたこの精神文化に包まれ、この精神文化と一体のものとして存在した。

京都帝国大学の研究者は、その遺骨を盗み出して、それを学術的知の対象と化した。この行為はそれ自体が、奄美群島に深く根付いた精神文化を破壊する暴力であり、その精神文化の尊厳を踏みにじる行為にほかならない。植民地主義とはこのことを言うのだ。

原井の〈国境二七度線〉に対するこだわりと怒りの深淵には、この奄美に潜む悠久の精神文化に対する深い憧憬と愛着が潜んでいる。そして、その精神文化を破壊するものに対する深い憤りがある。

だが、原井は、京都大学の奄美人人骨を奄美人に返還する運動に取り組むなかで、奄美の民衆の社会意識に微妙な変化が生じていることにも着目している。奄美の遺骨収集地の地元住民は、遺骨の返還に懐疑的で消極的な態度を見せたからである。「返還された遺骨は誰が面倒を見るのか」「先祖が誰かわからない遺骨を今更返還されても困る」、と。奄美住民のこの遺骨に対する冷淡な反応を、原井はこう解き明かす。風葬の洞窟のムヤは戦時中に防空壕として利用された。そのために、遺骨は持ち出され、野ざらしにされ、無縁仏と化した。さらに、戦後の家制度、過疎化による村ぐるみの葬儀の衰退、火葬という近代的葬法の浸透などが、奄美住民を包み込んでいた精神文化から奄美民衆を引きはがす。

原井はここにも、〈国境二七度線〉の刃を見抜く。この刃が奄美の民衆の暮らしにまで密かに浸透し、風葬と一体となった南島の精神文化を破壊する暴力を行使しているのだ、と。〈国境二七度線〉は、奄美の精神文化と不可分であった奄美民衆を、その精神文化の破壊者へと仕立て上げていく暴力を行使したことを、原井は鋭く見抜くのだ。

それでは、この精神文化を担った当の南島の民衆にさえ見捨てられ過去の亡霊となったかのような奄美の精神文化は、民俗学者や人類学者の研究対象であっても、もはや現代とは無縁な異物にすぎないのであろうか。この精神文化に対する原井の執着は、たんなる妄想にすぎないのであろうか。

否である。この精神文化を切り捨てて全地球を覆い尽くした近代世界が、こんにち破局的な危機に直面しているからである。気候変動や核戦争によって、地球と人類が破局に追いやられようとしている。近代世界が生み出した資本という怪物がいよいよ制御不能な暴力を発動して、世界の週末を予見させている。この時代に、国境線を問いつつ、原井がたどりついた奄美群島の精神世界は、けっしてうち捨てられた過去の遺物などではない。それはむしろ、近代世界が誘発する破局的危機から脱して新しい未来を照らし出す貴重な灯明なのだ。かつて民俗学者や人類学者によって学問的知の対象として考察されてきたこの精神文化は、いまや危機にある近代文明のオルタナティヴとして、わたしたちがみずからの生活と文明のあり方を問い直す貴重な手がかりとしてたちあらわれている。原井はこの未来の灯明を求めて新しい旅に出立しようとする。だから、原井の旅は本書で終わらない。本書は、国境線のない、近代世界の彼方へと向かう遠大な旅の序曲なのだ。本書は、読者とともに、その旅立ちを決意する宣言の書でもある。

二〇一九年十月

斉藤　日出治

付記：京都大学に対する奄美人骨の返還運動、および喜界島の風葬に関しては、原井の論考『風葬――蘇生の祈り　南島人の死生観と京都帝国大学の遺骨蒐集』二〇一九年八月、を参照した。

転載・終